

植物は動かない。人には動かないことは不利に感じるが、植物の現在の繁栄を見るとそうでもないらしい。動かないので筋肉は不要だし、成長は外側にどんどん付け加えればいい。動かない植物だが、困ることもあるようだ。種子をつくるために花粉をやりとりする時や、種子をばらまく時だ。そこで開発されたのが花である。花は恐竜が繁栄していた

ひとはく 研究員 だより

白亜紀初期頃にできた。植物が作り出した花の仕組みを調べてみよう。サルスベリの花を見たことがあるだろうか。街路樹や公園に植栽されており、真夏の暑い時期に赤やピンク、白い花をつける。枝先に密集して咲くので、花は一見複雑な形に見えるが、1輪だけ取り出してみるとわかりやすい。細かくカールした花びらは6枚あって、花びらの根元は

研究員 半田久美子さん



①鮮やかなピンクの花を付けたサルスベリ
②サルスベリに飛来したハチ

■夏の花「サルスベリ」の秘密■

細い軸状になっている。花の中央には黄色い花粉のついたおしべが密集してよく目立つ。このほかに、おしべより長いナゾの物体が7本ある。これは何だろう。先端に花粉がついているのでどうやらこれもおしべのようだが、この花粉は茶色で目

観察していたらミツバチが飛んできた。中央のおしべにとまり黄色い花粉を集めている。ミツバチの足に付いた花粉団子も同じ黄色で、サルスベリの花を一つずつまわって花粉を集めていることがわかる。ナゾの長いおしべの先端は、ミツバチの背中に触れていた。

色と擬態でハチ介し受粉

花のつくりを調べるために、1輪取って半分は切ってみた。すると、おしべの根元に子房があった。種子のもとが入っている部分だ。子房を上にしたどつていくとめしべが1本ある。長いおしべのうちの1本はめしべだった。おしべに擬態した、めしべ。何のためにこのような形をしているのだろうか。ミツバチの背中に長いおしべの茶色い花粉がつき、ミツバチが別の花に行くと背中の花粉がめしべにつく仕組みになっているのだ。

サルスベリはミツバチ用に目立つ黄色い花粉をつくる。花粉を集めに来たミツバチの背中に自動的に受粉用の茶色い花粉がついて別の花まで運ばれる。受粉用の花粉は目立つ必要がないので色がついていない。サルスベリの花はこのようなユニークな仕組みでミツバチを使って花粉を同種の木とやりとりしている。

すべてのキレイな花は動物にアピールするため目立つ色や形をしている。キレイな花にご用心。ヒトも植物に使われているのではありませんか。